

雙化度龕取藏封泥總計貳百六十二個

右評価額一方十五円合計三千九百卅四也、昭和六年十二月廿三日定

ここに見える「平龕」とは大谷氏と親交のあった篆刻家園田湖城の号であり、「雙化度龕」とは、「化度寺故僧暹禪師舍利塔銘」拓本を所蔵されていたことによる大谷氏の号であろう。したがって、禿庵文庫蔵品のうち百点は、園田湖城から譲り受けたものであることが明らかとなるが、それ以外の分については、現段階ではその伝来経路は不明である。

〔附記〕本稿執筆にあたって、大谷大学図書館には、同図書館所蔵の封泥および「大谷瑩誠師宛て書簡」の閲覧をお許しいただいた。ここに記して、関係各位に謝意を表したい。

## 古和讃の構成と表現に関する一考察

広小路直人

平安時代に成立した和讃を古和讃という。内容は仏法僧を讃えるものである。表現上の特徴は流麗で優雅であるとされる。後世においてもこれらの和讃は歌いつがれ、またその流れを汲む和讃も制作される。こういった古和讃や、その流れにあるといわれる和讃の特徴について、仏讃・法讃・僧讃の代表的なものの一部を取り上げ、構成や表現などから考察を試みたい。

最初期の和讃と考えられているものに、千観（九一八―九八三）作「極楽国弥陀和讃」がある。現在伝わっているものは六十八句である。構成及び内容は以下の通りである。冒頭から一八句目ま

で、阿弥陀仏の浄土の様子を阿弥陀経によって具体的に描く。そして四十八の誓願をいい、南無阿弥陀仏と唱えることの功德を説く。その後「25 浄土十方オホケレド 26 極楽ワレラ縁フカシ 27 仏三世ニ在セド 28 弥陀ハ我等ニ契アリ」（行頭の数字は何句目かを示す。以下同じ）と、我々と極楽や阿弥陀仏は近しいものというところが強調される。続いて、浄土に生まれた後のこと（「37 我等ガ此身シマム」「40 此身ハ聖ヲ友トシテ」など）を記す。あわせて人身は受け難く仏には遇いたい事が書かれる。そして、阿弥陀仏を頼まねば「48 我身三途ニ落チヌベシ」「56 我等ハ浮ム時ナケン」とする。以上のような展開となっており、より浄土の様子を実感的に感じさせ、この和讃を聴き、歌うものが実体験するかのような構成になっている。また全体を通して、言葉の選択などの表現面においては、当時仏教の専門知識のない人々にとってもわかりやすいものであったと想像される。

同じような内容の和讃に『弥陀如来和讃』がある。覚超（九六〇―一〇三四）作と伝えられるが疑わしく、成立年代は下ると推定される。ここでは「13 情々思ひつらぬるに 14 我等も仏生具足して 15 仏に替らぬ身成ども」「26 哀せつなき我等かな 27 人々我身を思へかし 28 我身を思ぬ果なさよ 29 此世限りの我身かよ 30 此世が有ば未来あり 31 仏に成るも我身なり 32 地獄に陥も我身ぞや 33 心ひとつの仕業にて 34 苦にも楽にも逢身ぞや」などというように、極楽浄土や阿弥陀仏がより身近に感じられるような表現がみられる。つまり極楽も仏も我々と連続した存在、人間の側からの発想が見て取れる。言葉の易しさと同時に、このような発想・展開が人々にとって受け入れられやすかったのではないかと考えられる。

源信(九四二—一〇一七)作と伝えられる『極楽六時讀』は他の文学作品などにも少なからず影響を与えた。そこでは浄土に往生した人が、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時の様子や、その時に行われる仏事の数々が描かれている。もちろん物見遊山のものではなく、仏の教えが説かれている。しかしとりわけ浄土の莊嚴などの叙述は具体的である。このことと極楽を見て回る人物の設定とが合わせると、『極楽六時讀』を歌うものがその人物の視点に重ね合わせることににより、いっそう実感的に極楽の様子が感じられるような装置が整っているといえよう。

『栄花物語』巻第十七「音楽」は、後一条天皇の治安二年(一〇二二)七月十四日の法成寺金堂供養の有様を中心に、金堂および執り行われた行事や参詣した人々の華やかな様子を、極楽世界を思わせるかのように描いた巻である。ここに『極楽六時讀』の一部が引用されており、極楽さながらの法成寺金堂供養の様子を、『極楽六時讀』の表現を援用して描いている。『栄花物語』に引用される部分は、日中讀と中夜讀に見られる。これら(これら以外もそうであるが)は、特に極楽の外観などの様子のみを描いているのではない。しかし『栄華物語』作者や実際の記録者であろう尼君たちにとって、「音楽」で取り上げられているようなことををより効果的に表現するにはふさわしく、また関心の高い部分であったのではないか。また『栄華物語』読者と想定される人々にとっても、自然に思い起こせる部分であったと考えられる。

古和讃における代表的かつ最初の僧讀は『天台大師和讃』である。ごく簡単に構成及び内容を記すなら以下のようになる。まず冒頭に天台大師智頭の、仏とほとんど同じような尊い姿を視覚的に示す。そして幼少年時代の靈異や修学などが年を追って叙述

されていく。そのためこの和讃を読む人に天台大師の成長を側で見ていくような印象を抱かせる。またたとえば天台山に行く場面、「68周ハ八百余里ニシテ 69八重一ガ如クナリ 70東蒼海遙カニテ 71蓬来方丈不遠カラ 72西ニハ長山連テ 73人無キ境ニ入りニケリ 74石橋渡テ如虹ノ 75滝水落テ布ヲ引ク 76鳳鳥鸞鳥飛ヒカケリ 77銀地金地二分レタリ 78白道飲カ旧キ室口79王子普カ本ノ跡ト 80一々廻テ見給ウニ 81昔夢ニ不異ナラ」のように、時として語り手の視点が天台大師と同化するかのようになづく部分もある。このため、あなたも読み手が実際にその風景を目の当たりに見るかのような効果を与える。長行に渡って大師の行状が述べられ、「24凡ソ大師ノ一生ノ 25所作ノ行業多ケレハ 26多ノ功德ノ其中ニ 27少ノ功德是云ハ 28造ル寺ハ三十三 29写ル経ハ十五藏 20金壇絵像十萬遇 21渡ル僧衆ハ四千人 22伝教覺子三十人 23習禪覺士充滿リ 24凡五十余宗ノ 25道俗其ノ数難知 26大師ノ德行無ハカリ 27心モ言モ不及 28一言讀ヲ縁トシテ 29三会ニ必ス值遇セン 三反」と、数を表す語を重ねてまとめるように締めくくられる。

『天台大師和讃』は『雑談集』巻第六「錫杖事」で少し触れられている。そこでは意味を理解しての読み方唱え方かどうかが問題となっている。和讃の広がりにおいて、その理解の浅深には様々なレベルがあったと容えられる。むしろ意味は理解されずに広まっている状況や、受容する側が意識するしなせよ、恣意的な解釈を挟んだりすることもあり得ることが伺われる。

後に作られる僧讀の基本形を作ったといえる『天台大師和讃』であるが、その流れを汲むものに『慈悲大師和讃』がある。ただしその成立は平安時代まではさかのばれないと推定されてい

る。「天台大師和讃」では「51説法もつとも第一なり」と、出典を踏まえ、また控えめではあるが語り手が直接的に褒め称えたような部分がある。それが「慈慧大師和讃」においては、「7高僧多キ其中カニ 8大師ニ過ギタル人ハ無シ 48智慧弁才無窮ナリ 81中ニモ大師ハ勝レテゾ」など、より強まった表現となっている。古和讃においては仏・仏世界ともに近い位置から語られているが、人間である僧はより身近に感じさせるように語られるといえよう。中世和讃の僧讃としては親鸞(一一七三—一二六二)が「高僧和讃」を制作している。個人に寄り添った古和讃系のものに比べ、その僧個人の歴史ではなく、個人の時間や空間を超えた仏法の流れを軸として展開される。ここから古和讃を逆照射するなら、よりそういった点が際だって見えてくるだろう。しかしこれは親鸞独自の個性といえ、後に親鸞を歌った和讃では出自などから始まり年を追って歌われていく。

仏讃・法讃・僧讃のいずれにおいても、古和讃はそれらに近い視点から語られる。それらを聴き歌う人にとつても、より身近に実感的に感じられるように構成されているといえよう。後世作られる和讃はこういった面が強調されていくと考えられる。それは分かりやすく親しみやすいものとなつていく反面、一面においては俗化する要因であるとも考えられる。以上が本発表の概要であるが、文学的価値は劣るといわれるものの多数制作された近世以降の和讃を検討していくことが課題となる。

## 荆南における詩僧齊己

福井 敏

衡岳沙門・齊己(八六四?—九四三?)は、ほぼ同時代を生きた禪月大師・貫休(八三一—九一一)と並んで、唐末五代における二大詩僧とされる。詩僧とは、僧としての求法を行う以外にも士人や他の詩僧と詩の応酬を積極的に行う僧のことをいう。唐が滅んで以降、多くの詩僧は北方に成立した、後梁・後唐・後晋・後漢・後周という「五代」王朝の勢力範囲ではなく、「十国」と呼ばれる地方政權、なかでも南唐や呉越といった江南地域や今日でいう四川地域にあたる前蜀及び後蜀に住していた。

かれらがこういった地域に偏在していた理由には以下のようなことが考えられる。まず、江南地方の場合は南唐の李氏や呉越の錢氏が仏教を厚く保護していただけでなく、中唐初期の靈一や皎然といった江左の詩僧たちの活躍の場であったことも影響していたであろう。また、蜀の場合はもとより仏教の盛んな地であったうえに戦乱の世にあつてもある程度の文化水準を保っていたため、僧だけでなく多くの文人も避難したためである。

齊己もその例外ではない。入蜀の志をもつていた彼は、途上の荆南に居を定め、龍興寺の僧正となった。このことは「梁江陵府龍興寺齊己傳」(『宋高僧傳』卷三十)に記載されているのだが、この伝にはこれ以外にも齊己が荆南に留まることになったいきさつについて

高氏遂割據一方。搜聚四遠名節之士。得齊之義豐南嶽之己。